

「陸上王国・埼玉」であるため・・・全中にて

★それぞれの役目

先日熊谷で、10歳から17歳までの若い選手を対象に「陸上クリニック」が開催された。小原先生、西村先生をはじめとする、強化部や埼玉の陸上を支える陸上協会の諸先生方の熱意で、陸上競技をさらに活性化させようという動きが活発である。

昨今は都道府県別に強化合宿や記録会、さまざまなセミナーが盛んに開催されており、北海道などを代表とする新勢力の活躍が目覚しい。もちろん王国・埼玉も、なにもしなければ人口減少、スポーツ離れからくる弱体化は必至。

一度弱くなったら再生するのは至難の技・・・

未来の子供たちに「へー、埼玉はむかし陸上強かったんだ・・・」と言われなため、「屈強なる埼玉」を支えた先生方は立ち上がっているのである。



★「もっとも盛り上がった全中大会 2009」

現在の21歳（2006年のインターハイ学年）はゴールデンエイジとして、日本の陸上会を牽引しているのは言うまでもない。男子短距離は江里口、後藤、荒尾、我孫子選手らが日本代表の次世代を担い「リレーの日本」を受け継ごうとしている。

そして女子の福島選手、高橋選手は高校記録、日本記録、そしてユニバで表彰台、世界陸上で予選突破・・・と過去の日本女性とは明らかに一線を画す活躍を残している。

こういった先輩たちに大きな影響を受けて、現在の中学生が活況を呈している。陸上界では「ニューゴールデンエイジ」と称されているのだ。

今年の今年の全日本中学選手権は新記録ラッシュの年となった。

男子400m 48秒18

女子200m 24秒36

女子800m 2分7秒51

女子400mR 47秒30

女子混成4種 3133点

陸上競技誌いわく「もっとも盛り上がった全中」と記している。

男子400mでは準決勝で5人が49秒台をマークし、記録を狙ったという決勝では1位中学新記録、2位も48秒台。3位49秒台という驚異のハイレベルとなり、2位3位は埼玉勢。

ほかのレースも、中学歴代10傑を大きく塗り替える白熱した大会となった。

なにより圧巻は女子400mRだ。

★不滅の「常盤中学記録」

陸上関係者なら周知の事実。常盤中学監督の大森先生が、のちに埼玉栄女子軍団を作り上げたことは言うまでもない。強い選手がいる時代だけ総合を取るのではなく、常勝軍団として日本高校陸上界に不滅の金字塔をうちたてた。

その大森先生が常盤中学監督時代（～1983）、築き上げた栄冠もまた計り知れない。

いくつもの種目で全国制覇をなしとげ、幾多の中学記録を更新した。

所沢向陽中学と並んで、「強い埼玉」を象徴し、昭和50年代日本中学歴代記録ランキングに多くの結果を残していたのだ。

今年までの女子400mRの中学記録は、その常盤中学の出した47秒86。全中とインターハイのスター・城島直美選手を要したスーパーな記録であった。このときのレースを私はよく覚えている。

200mの予選で24秒60の中学記録をマークした城島選手は決勝を棄権し

た。そして400mRでも見事に中学記録。・・・最初から200mの記録は予選で出す予定であり、400mRでも中学記録を更新する作戦であったようだ。インターハイでさえ十分通用しそうな中学記録。

今年、その女子400mR中学記録が26年振りに更新されたのであった。

それを成したのはやはり埼玉の朝霞第一中学。

7月の関東中学の決勝でマークされた中学記録を、さらに更新する47秒30というスーパーな記録であった。

2位につけた差は1.19秒。単独中学とは考えにくい記録をマークした。

持ちタイムは、

1走 12秒65

2走 12秒10

3走 12秒74

4走 11秒89

偶然速い選手が集まったのではなく、的確なトレーニングを自主性をもって積んだ結果といえよう。

アンカーの土井選手は2年生。単独種目の女子100mも圧勝した。

11秒89は中学歴代4位、もちろん中2新記録である。

土井選手には、ぜひ来シーズンも順調に楽しく走ってもらいたい。

埼玉の宝なのだから、シニアになるまで息の長い活躍、大きな選手になってほしい。

埼玉は、優勝3種目を含む14種目で入賞。

「王国・埼玉」は今年も強かった。

県別得点では堂々の1位。数多くの県中学新記録が生まれた。

まさに長い年月をかけて、埼玉陸上協会のみなさまがなした結果であるといえる。

筆 撮 のもと歯科クリニック

愛される組織目指す 埼玉陸上競技協会会長・西村 暢二氏に聞く (埼玉新聞より)



埼玉陸上競技協会会長に、西村暢二氏がこのほど就任した。初代会長から数えて11代目の大役だ。今後の埼玉陸協の取り組みなどを聞いた。

―就任してから約半年間の感想は。

「夏には小、中、高校の全国大会があり、いずれも優勝者を輩出できた。ジュニア育成を目標とした『2010年プラン』を経験した選手なのもうれしいこと。新潟国体でも天皇杯2位、皇后杯3位と全国的に素晴らしい成績を残せた。目指していた財政の健全化も、一流スポーツメーカーなどに協賛いただいで順調に進んでいる」

―今後は。

「来年度をめどに社団法人化したい。1月には日本陸連からも、全国の陸連へ法人化推進の通知が届いた。会員数をスリム化しつつ、ホームページを管理する情報部や企業に援助をお願いする協賛部などの設置を考えている。社会的信用度も高まるだろう」

―2011年には同年の世界陸上(韓国)の予選も兼ねた陸上界最高峰の日本選手権が開催(6月・熊谷スポーツ文化公園陸上競技場)されるが。

「2004年の埼玉国体、08年の埼玉総体の成功が評価されたと思う。中田次夫委員長(大宮高教)を中心にプロジェクト委員会を組み、日程や細かい部分を詰めている状況。先の二つの大会運営で学んだことの集大成にしたい」

―成年、中学生の優秀な選手の県外流出が懸念されているが。

「成年は長距離チームを持つ実業団はあるが、短距離チームが少ない。今後

は県内企業にお願いして開拓できれば。中学生に関しては、県内で競技を続けてもらえるよう、ありとあらゆる手段を取りたい。例えば、中体連の指導者の協力を得て積極的に働き掛けたり、各高校に競技力向上をしてもらったりなど」

－ほかには。

「『強い埼玉陸協』をキャッチフレーズに、競技や運営基盤、審判の強化を目指す。また『愛される埼玉陸協』として、陸上関係者だけでなく、広く県民の方々に愛されるようにイベントを企画。市民ランナー向けの競技会なども考え、底辺を育てていきたい」



西村暢二(にしむら・ちようじ) 埼玉陸上競技協会会長。春日部高一埼玉大卒。1962年に蕨高に赴任し、羽生一高、越谷東高の陸上部監督を歴任した。春日部東高校長などを経て、99年から同協会副会長を務めた。東京都北区出身。70歳。

その2へ